

隨筆

7 桂翁墓誌銘

嗚呼。此桂翁之墓也。翁諱景晴。稱此面。號泊齋。父諱景道。有三男一女。長夭。次景光嗣。季即翁。一女夭。翁為人溫厚。能容人。口未嘗稱人之惡。至其善雖小必稱焉。年二十。為吏有功。官賜祿三石賞之。翁事親孝。家雖貧。常極滋味養之。而自奉儉素。故晚年頗致富。翁兄之妻。予姑也。予蚤喪二親。煢々無告。姑閔之。躬親撫養。翁亦閔之。視予猶子。以嘉永二年夏四月。罹疾。以其冬十二月二十二日卒。享年七十有七。葬普濟寺山先塋。嗚乎。予自喪父母。至今十餘年。為翁所愛。情似父子。泣而為之銘。々曰

上有青松。下有片石。己乎桂翁。于安厥魄。

時年十九

積文

桂翁墓誌銘

嗚呼。此の桂翁の墓。翁の諱は此面と稱し泊齋と號す。父の諱は景道三男一女有り。長は天(若死に)次は景光が嗣ぐ、季(末)は翁一女天す(若死に)。翁人は温厚を為し能く人を容れ、口に未だ人の悪くを嘗て稱せず。至りて其の善は小なりと雖も必ず稱せられ。二十年の吏(役人)に功有りて為す。官禄三石之れ賞を賜う。翁は親孝を事として家は貧しきと雖も。常に滋味之れ養うを極めて。自から奉じて儉素故に晩年は頻る富を致す。翁兄の妻予の姑(叔母)なり。予蚤く二親喪い弔々(独りぼっち、孤兒)告す無く。姑之を閔み躬身(親に代わり自ら)親しく撫養(慈しみ養う)翁亦之を閔みて予を視て子の猶し。嘉永二年夏四月を以て。疾に罹り其の冬十二月二十二日以て卒す。享年七十有七。普濟寺山先塋(墓)に葬る。嗚乎。予父母を喪いてより。今に至る十餘年翁の愛しむ所を為し。情は父子に似たる。泣いてこの銘を為す。銘に曰う。

上有青松 上に青松有り

下有片石

下に片石有り へんせき

己乎桂翁

己に乎あ桂翁 あ けいおう

于厥魄安

于に厥れ魄を安ずる こゝろ そ はく あん

時 十九歳

語釈

景晴かげはる 此面このおもて 桂景晴けいけいはる 五竹の少年時代を撫育した人。墓誌銘はしめい 死者の生前の徳行、功績などを金石にしるした文章、墓に埋めるのを墓誌とい

いい、墓誌の終わりにつけられた韻文を銘という。嗚呼ああ 感嘆詞。翁おう 桂翁けいおう 景晴かげはる 桂翁の名。泊齋はくさい 景晴の号。諱き 忌名。景道かげみち 桂翁の父。長天ちやんとん

長子が夭折、早死に、若死に。景光かげみつ 次男。嗣ついで 継ぐ。天あま 夭折、若死に。早死に。温厚おんこう 優しくて情が厚い、暖かで穏やか。嘗てかつ 前に、以前。

雖いかに けれども、たとい。滋味じじ 滋養と美味。自奉じじゆ 自ら奉じる。儉素けんそ 質素儉約。晩年ばんねん 後年、年をとってから。頻しきりに とも、大変に。姑こ 伯母、

叔母。祿ろく。俸祿。賜たまは 賜る。下賜げたまひ 蚤そう 蚤のみ 転じて、小さい、子供。喪そう 喪失、喪う、死ぬ。鶯けいけい 鳥が飛び巡る、一人ぼっちで頼るところがないさま。

撫養ぶよう 撫育、撫で養つ。閔あわれ 憐憫、憐れむ。疾罹しじり 疾病に罹る。享年きやうねん 天から受けた年数、寿命、息長らえた年数で死後にいう、行年。普濟寺山ふじじきやま

桂翁の墓のあるところ。先塋せんえい 先祖代々の墓。卒すい おわる、尽きる、死ぬ。葬まう 埋葬する、死体、骨を土中に埋め収める。青松せいしゆ 青い松。片石へんせき 石

の欠片。己すて に 己すて もつ。厥けつ その、それ、類づく。魄はく 魂魄。安あん 安らかに、安

吾徒以文相會者于茲有年矣号曰鹿鳴社今茲嘉永三年正月日會于逍遙之樓一壺之酒一盤之肴相對以歡飲焉酒已酣欲暮者暮琴者琴或嘯或哦暢然怡然由夕然各樂其樂也遂命善画者圖之而各為之序昔宋時某公會于西園當時以為美談彼諸公者吐辞為文下筆為小雖園林一時之遊而人嘖々稱之宜乎其名施於後世也今也口吟於六藝之文人以為迂闊手披於百家之編而於世不濟於用公私無耶取信言出而見笑於列殆不異國子先生也但幸得為太平之民間暇無事糟糠有食檻褸有衣一飽一暖無求無營唯文墨是娛雖自知其迂闊其樂也不改雖自知孺散弄翰也未止而今此圖之成也亦援筆以為序云爾

釈文

鹿鳴社雅集図の序

吾れ徒に文を以て相會するは、茲に有年(数年)号んでて曰う、鹿鳴社今茲に嘉永三年正月日會して、逍遙(満足する)これ楼の一壺の酒一盤の肴に、相對して以て飲飲する、酒は己に酣わ、暮にせんと欲し暮は琴にせんと欲す、琴或は嘯或は嗽暢然(各人が伸び伸びと)怡然(歡び楽しむ)、由々然(満足なさま)、各の樂しみは其れ樂しみなり、遂命善き画は図の各之れをて之れを為すの序に、昔宋時(前二八六年代)某々公會西園當時美談を為す、彼の諸公は吐辭文の下筆(すぐ書いて文書にする)為して章を為し、園林一時の遊びと雖も人は嘖々(口々に褒めそやし)稱してこれ宜しく其の名を施して後世より、今なる口吟六藝の文より人は以て為す、迂闊(回り口説く事実にあわない)に手をした百家の編より世に於て濟されず(成し遂げられない)、公私に用いて町取(耳垢を取るほどの価値)る無し、信言(誠ある言葉)出ずるは見て笑つ列ねて殆ど異ならず國子先生なるは、幸いにも太平の民間暇を為して無事、糟糠食有り、檻褸の衣有り一飽一暖求める無く、嘗むは唯だ文墨是れ娛しみ、自から其の迂闊を知り其の樂しむと雖も、改めず自からそれ擽すると雖

吾公。嗣世之三年。立學右文。民之疾者。去之。民之苦者。除之。於是。風移俗易。士民咸和。乃命構樓於尾津海濱。扁曰觀海。命臣裕作文以記之。夫觀海之樓。背青山吞蒼海。遠望預山。近眺仙島。若夫汀草長而蒼々。渚柳秀而青々。鷺鷥集州。鳧鷖眠沙。波靜瀾恬。海色如黛。遠翠遙青。帶烟橫靄。此春之佳者也。蘆花如雪。蒲葉戰風。雨霽雲盡。天無纖翳。而月出於島嶼之上。皎然照波。珠玉一面。玻璃千里。茫茫乎無有際涯。此秋景之佳者也。其他。時換景變。奇賞百出。不可具狀。公政務之暇。來登此樓。焚香煮茶。仰而望。俯而觀。其樂也。蓋洋洋焉矣。夫樂亦不一。有不肖者之樂。有聖賢之樂。昔者。楚王登強臺而望崩山。其樂忘死。遂盟強臺而弗登。曰。後世必有以高臺陂池其亡國者。可謂能知所戒矣。雖然。其為樂也。獨樂其樂也。此非聖賢之樂也。孟子曰。文王以民力。為臺為沼。而民歡樂之。謂其臺。曰靈臺。謂其沼曰靈沼。樂其有麋鹿魚鼈。文王之樂。與民同之也。此聖賢之樂也。文王與民同樂。是以自樂且樂。而民亦樂其樂也。楚王夫與民同樂。是以自樂其樂。而民夫樂其樂也。故楚王弗登強臺。而無益於民。文王為靈臺。而民歡樂之也。由此觀之。國之廢興存亡。在與民同其樂與不耳。不在登與弗登也。

是故。古之聖王。無不與民同其樂者。今公之為樂也。其亦在茲歟。嘉永四年辛亥。二月日。臣裕謹撰。

時年二十一

積文

觀海樓記

吾公嗣世（嗣子が世を嗣いで）三年、立学右文（學問を重んずる）民の疾は之れを去け、民の苦みは之れを除き、
是れ於て風は移り俗は易し士民は咸和して乃ち命は尾津海濱に於て樓を構え扁く曰く。海を觀て臣
裕に文を作ることを命ず以て之を記す。

それ海觀の樓は青山を背し蒼海を呑み、遠く預山を望み近く仙島を眺むれば、夫れ汀草長くして
蒼々（草がさかんに生い茂っている）たり、渚の柳は秀いいでて青々たり、鷺鷥は州に集まりて鳧鷖は沙に
眠る、波は静かになみは大きくうねり、海色は黛の如く遠く翠は遙かに青く、烟り帯びて靄を横
たえて、此れ春の佳き景なり。蘆花は雪の如く蒲葉は風に戦き、雨は霽て雲は盡きて天に緋翳（僅かな

曇も無し（なし）。而て月於て島嶼（しまうみ）の上に出る。皎然（けうぜん）と波を照す。珠玉（しゆぎよく）一面。玻瓈（はり）千里。茫茫（ぼうぼう）と際涯（さいがい）有や無し。此の秋景（あきけい）之佳者（か）也。其の他。時換り景變る。奇賞（きしやう）百出（ひやくしゅつ）。具状（ぐじやう）可らず。公政務（こうせいむ）の暇。此の樓（ろう）に來り登る。香を焚（たき）き茶を煮。仰（あや）ぎ而て望む。俯（ふし）て而て觀る。其の樂也。蓋（けだし）洋洋（やうやう）矣。夫れ樂亦（い）一ならず。不肖（ふしやう）の者之樂有り。聖賢（せいけん）之樂有り。昔者。楚王強臺（そおうきやうたい）に登り而て崩山を望む。其の樂死（い）忌む。遂に強臺（きやうたい）に盟（めい）而て登らず。曰く。後世（こうせい）に必ず高臺（かうたい）陂池（はち）以て其の國亡（し）ぶ者有り。能く戒む所知る謂う可し矣。然りと雖（いへ）。其の樂為す也。獨り其の樂樂也。此の聖賢（せいけん）の樂に非らず也。孟子曰く。文王民の力以て。臺（たい）為す沼（しゆ）為す。而て民の樂之歡ぶ。其の臺（たい）謂う。靈臺（れいだい）曰く。其の沼謂う靈沼曰く。其の麋鹿（みりく）魚鼈（ぎやへつ）有り樂。文王の樂。民與に之同じ也。此の聖賢（せいけん）の樂也。文王民と與に同じ樂。是れ以て自且つ樂樂。而て民亦其の樂樂也。楚王夫れ民與に同じ樂。是れ以て自其の樂樂。而て民夫れ其の樂樂也。故に楚王強臺（そおうきやうたい）に登らず。而て。於て民益無し。文王靈臺（れいだい）為す。而て民樂歡ぶ之也。此の由之觀る。國の廢興存亡（はふきんぐんぞんぱう）。民與に其の樂同ならず與（あ）に在り。登る與（あ）に在らず登らず也。是れ故。古の聖王。其の樂同じ民與（あ）にあらず者無し。今公の樂為す也。其の亦茲（い）に在り。嘉永四年辛亥（しんがい）。二月日。臣裕謹撰（しんゆうきんせん）。

姊諱阿琴。幼而慧敏。天資絕俗。丰采清麗。肌膚皙白。世人稱為秋水之白蓮。十歲喪親。為姑所養。姑親教女巧。一見便能之。雖老婦不能及焉。紡績之暇。姑自教讀書。一見不復忘。年才十有四。讀佛經。有省覺人生如幻。深歸佛乘。一日持阿彌陀經一卷。及觀音經一卷。至邑妙覺院。乞僧。僧見其妙齡。驚嘆曰。娘子妙齡歸道。成佛曷疑。既而晨昏誦經。念佛不已。姑戒之曰。汝年猶少。今非念佛之時。待老大而後為之可矣。姊曰。人生無常。此身如朝露。朝難料夕姑何出此言耶。姑服其言。亦不奪其志。爾後誓曰。念佛必至百萬。及至卒日。遂滿數。某月日遘疾。越九月九日。疾愈篤。自知其死。念佛不絕。迨息將絕。西向瞑目。手頻屈指。口猶喃喃。頤耳聽之。呼阿彌之聲。嫋嫋不絕如縷。姑問屈指何事。曰以代念珠耳。言畢宛然而逝矣。嗚乎哀哉。年才十有七矣。祔于正覺寺先塋。嗚乎世有不幸如予者耶。四歲喪考。五歲喪妣。亡何亦喪姊矣。嗟乎何其不幸之甚也。俯仰今昔。不堪泣血之漣如也。攬泣銘之曰。

父兮。母兮。先汝逝矣。姊兮。姊兮。先吾逝矣。人匪金石卒其逝矣。

此篇係二十三四歳作

匪蹈襲。匪鑿空。厘々廿四字。自心肺流出。盡骨肉死生。無窮之感使讀者不覺泣下。

积文

阿琴墓誌銘

姉の諱は阿琴。幼なくして慧敏（聡く賢い）天資（生まれつき天が人に

授けた性質）絶俗（俗人とは異なる）丰采は清らかにして麗しく肌膚は皙白（星のごとく、また白く）。世の人は秋水

の白蓮を為すと稱す。十歳に親を喪い姑（叔母）養い為す所。姑親から女巧（機織り裁縫）を教る。一見し

て便ち能くして。老婦と雖も能くに及ばず。紡績の暇に姑自ら讀書を教え。一見して復た忘れず。

十四歳で佛經を讀み。人生幻の如く有りと覺り。深く佛乘に歸し。一日阿彌陀經一卷及び觀音經一

巻を持ち、邑の妙覺院に至りて。僧の訓誥を乞う。僧は其の妙齡を見て驚嘆して曰う。娘子妙齡

にして道に歸す。成佛は曷ぞ疑わん。既にして晨昏（朝に夕に）經を誦えて、念佛を已めず。姑は

之を戒いましめて曰いわふ。汝なんじの年は猶わかお少すくく。今いまから念佛ねんぶつの時に非あららず。老大らうたいたいを待つて然しかる後のちに之を為なす可べし。姉あねは曰いわふ。人生無常じんせむじょう此この身みは朝露あしたの如ごとし。朝あしたに夕ゆづへを料はかり難がたし姑こは此この言ことばに何なににも出いせせず、其そのの言ことばに服したがう。亦また其そのの志こころを奪うばわず。爾ついで後のち誓ちかつて曰いわふ。念佛ねんぶつは必かならずず百萬ひゃくまんに至いたる。卒つひ日じつ（死ぬ日）に至いたるに及および。遂ついにに數かずを満みす。某ある月つき日ひ疾やまいに邁あい九月くわがつ九く日にち越こして疾やまい愈よ篤あつく（病やまい氣が重おもくなり）。自みづから其そのの死しを知しり。念佛ねんぶつは絶たえず。息いきは將まさに絶たえんとすに。迨およぶも西向せいむく瞑目めいもく手ては頰しきりに指ゆびを屈かす。口くちは猶なお喃なん々々（口くち數かず多おほく）耳みみに頰しきりにして之これを聽きく。阿彌あみを呼よぶ聲こゑは嫋たうたう々々（音ね聲が弱よわ々々しく声こゑが細こまく長ながく途みち切きれな）。絶たえず縷いと（細こま々と述のべる）の如ごとし。姑こは指ゆびを屈かして何事なにことかと問とうに曰いわふ、以もつて念珠ねんじゆに代かりての言ことばで宛然えんぜん（恰たつも丁てい度）逝ゆく。嗚乎ああ。嗚乎ああ。哀あはしいかな。年とし十七じち歳さいにしてここ正覺しやうがく寺じの先塋せんえいに附つす。嗚乎ああ。世よに不幸ふこう有あり予われ如ごときは四歳しさいで考こうを喪うしない五歳ごさいで妣ひ（女むすめ兄弟けいだいの中なかの長女）を喪うしない。何なにんで亡なす亦また姉あねを喪うしなう。嗟乎ああ何なにんで其そのの不幸ふこうの甚こだしき。俯ふして今昔いまこゝろを仰あげ。泣血なみけは漣なみの如ごとくに堪たえず。泣ないて攢あ（引ひき取とる）し之これを銘なづして曰いわふ。父ちちや母ははや。汝なんじは先いいで逝ゆく。姉あねや姉あねよ。吾われに先いいで逝ゆく。人ひとは金石きんせきに匪あらず卒つひして逝ゆく。蹈襲たうじゆに匪あらず（常道じやうだうを行ない古ふるいしきたりに従したがうのではない）

鑿空に匪ず（新しく道を切り開くでもない）

塵々廿四文字「前行の原文」「父兮母兮姉兮姉兮先吾逝矣人匪金石卒其逝矣」を云う。心肺より流れ出る。骨肉の死生に盡きて。窮り無きを之れ感ず。讀む者を使って覺えず泣き下る。

此篇二十三、四歳

語釈

阿琴あこと＝五竹の姉。墓誌銘ぼしじりょう＝死者の生前の徳行、こうせきなどを金石に記した文章、可化に埋めるものを墓誌といい、墓誌の終わりに付けられた韻文を銘めいという。諱か＝忌み名、忌む、嫌う、口にするのを嫌う、かくして云わない、憚る、懼れる、戒名、慧敬せいじん＝聡い、賢い、聡く知恵がある。天資てんし＝天分の資質。絶俗ぜつこく＝俗にはない。丰采ほうさい＝姿、美しい姿。清麗せいらい＝清く麗しい。肌膚きふ＝肌と皮膚。皙白せつぱく＝明らかに白い、明るい、賢い。世人せじん＝世間の人。秋水しゅうすい＝秋の澄ぎった水、全て清らかな物のたとえ、人の心、研ぎすました刀剣。白蓮びんねん＝白い蓮の花。喪そう＝喪う、死ぬ。姑こ＝伯母、叔母。女巧じょこう＝裁縫、炊事など女の仕事とされて居た物全て。紡績ほうしやく＝糸を紡ぐ。佛乘ぶつじょう＝歸す＝帰依。阿彌陀經あまたまきょう＝無量の意、慈悲深い如来の名浄土宗、真宗のお経。觀音經かんのあみきょう＝菩薩の一つ慈悲の化身といわれ、ぼさつのうち最も広く信仰されている。阿彌陀如来の左脇士、のお経。邑むら＝村、里。妙覺院みょうがくいん＝寺名。訓詁くんご＝文字の昔の意味の解釈、古訓。妙齡めうりやう＝若い年頃、うら若い。驚嘆おどろき＝驚き嘆息する。成佛じゆつじょう＝佛に成る。曷か＝間違い無し。晨あした＝早朝。昏こ＝黄昏。日暮れ。誦じゆ＝唱える。念佛ねんぶつ＝佛を念じる。波阿彌陀仏を唱えることを唱名念仏といい、正座して佛の姿を念じ思い浮かべるのを觀想くわんざうなんぶつといい、佛の本質の理を觀じるのを實相念仏という。戒かい＝諭す、訓戒。汝なんじ＝お前、そなた。雖いまだ＝思うに。娘子なんし＝娘の子。人生じんせい＝人としてこの世に生きること、人の一生。無常むじやう＝定めがない、人生の儂いこと。朝難あさづか＝朝病につき。夕料ゆふりやう＝夕べに死す。老大らうだい＝大人老人になり。爾後じこ＝その後。數滿かずみち＝満願。

疾邁しつまい病に遭う、まみえる。疾しつ疾病。愈ゆいよいよ。篤とく重い、重態、危篤。迨たいた及び、至る、まで、願う。瞑目めいもく目を瞑る。頻しんに頻繁に。
猶なほ未だ。喃喃ななくどくど話す、くどくど喋る。頎き懇ろに、長く、長い。阿彌あみ阿彌陀。嫻々じやんじやん風がそよぐ、しなやかで美しいさま。縷る糸筋、糸
すじのよつに細長い、つすれ、詳しい。念珠ねんじゆ数珠。畢ひつ終わる。逝ゆく逝去。正覺寺しやうがくじ阿琴の墓のあるところ。先塋せんえい先祖の墓。袷あひ会わせまつる、
先祖の墓に子孫と合祀する。喪そう喪つ、死ぬ。嗟乎さ感嘆または嘆き悲しむ声。嗚乎あ感嘆詞。考こう父、亡父。妣ひ母、亡母。俯ふ伏せる、伏して。漣れん
大波、さざ波、涙を流すさま。泣攢なみづみ泣き取り集める、引き取る。姉し上の姉のこと。今けい主語や文の後につけて感嘆や強調の語気を現す助字、訓
読には普通読まない。金石きんせき金屬と意志、鐘鼎と石碑。匪ひはこ、非ず、彩のあるさま。蹈襲たうじゆ古いしきたりにそのまま従つ、従来の決まりを堅く守
る。鑿空さくくう空の穴の意、空に穴を明ける。心肺しんぱい心臟と肺。骨肉こつにく骨と肉、肉親、親兄弟。死生しせい生と死。窮きゆう窮る、尽きる。泣下なみくだ泣き崩れる。
厩々きゆうきゆうほんの僅か。

11 都家寓居記

若水先生。宅之西南隅。有一茅屋。甚小。室僅容膝。壬子秋。余憮而寓焉。室之東北。為農家隔離見黃菜青麥。居然有郊野之趣。西南則錦屏山。蒼然出于槿籬之上。使人有塵外之想也。籬旁有三櫻樹。其一。花大而竊黃。其一花小而白。其一。花極大。白而帶紅。千瓣下垂。光彩照人。最可愛也。一日置酒。招先生。時櫻花盛開。酒酣。先生指花告余曰。是吾九華翁所愛也。每花開。翁輒來觀之。吟詠樹下。低徊不忍去。今年花則有。而人則亡矣。言畢潛然。蓋九華翁。為先生之親友。甚愛櫻花。嘗著櫻話一卷。而以客冬下世云。余乃謂先生曰。人生聚散悲歡。亦何常之有。余幼而失怙。貧窶不能自給。遂賣廬。已亥寓于松氏之室。壬寅寓于桂氏之室。壬子秋。遂來寓于此。屈指忽已二年矣。向之來時。萎然而枯者。今皆欣然而榮矣。蕭然而黃者今皆燁然而華矣。萬物得時。莫不發榮滋長。而余則瓢飲箪食。貧困如舊。一琴一書。依然故吾也。嗚乎。余十餘年間。三遷其居。而貧困如舊。則自今以往。漂泊無所底止。未知明年又在何處。此花可得復見乎否。相視愴然。遂酌及哺而別。余有感于身世。遂錄酒間語。以為寓居記。時嘉永六年癸丑。春三月初五也。時年二十三

釈文

都家寓居の記（都志見家に仮住まいの記）

若水先生宅の西南の隅一茅屋が有り。甚だ小さく室は僅かに膝を容る。壬子の秋余は僦りて寓す室の東北は、籬を隔てて農家を為し黄菜青麥を見る。居然り郊野の趣有り。西南は錦屏山蒼然として干槿（沢山の木槿）籬の上を出る。塵外の想い有りを人に感じさせる。籬の旁らに三櫻樹有り、其の一つ、花は大にして竊に黄色、其の一花は小にして白なり。其の一つ花は極て大きく白にして紅を帯る。千瓣垂れ下り、光彩照り人は最も愛す可し。一日酒を置き先生を招く、時に櫻花は盛開にして酒は酣なり、先生花を指し余に告げて曰く、是れ吾れ九華翁の愛す所なり。花が開く毎に翁は輒來して之れを觀る。樹下で吟詠低徊して去を忍びず。今年の花は則ち有りて人は則ち亡しなり。言い畢えて潜然たり九華翁は先生の親友を為す。甚だ櫻花を愛し嘗て櫻話一卷を著す。客冬以て下世して云う。余はそこで先生に謂い曰く、人生は聚散悲歡にして亦た何んぞ常に之れ有り。余は幼くして怙を失う。貧窶にして自給を能はず。遂に廬を賣り。巳亥に松氏の室に寓す。壬寅に桂氏の室に寓す。

壬子の秋遂に此れ來り寓す。指を屈すこと忽ち己に二年なり。向いの來る時、萎然として枯れ、今は皆欣然として榮るなり。蕭然として黄はそれ今皆燁然として華なり。萬物は時を得て榮えて滋長を發せず莫れ。余は則ち瓢飲筆食して、貧困舊の如し。一琴一書は依然として故に吾なり。嗚乎。余は十餘年間其の居を三遷す。貧困は舊の如し。則ち今より以て往く、漂泊は底止る所無し。明年又た何處に在るや未だ知らず。此の花復た見得可しや否や。相視る愴然として遂に酌み晡に及びて別れる。余の身は世に感ず有り。遂に酒間の語を録し以て寓居の記を為す。時に嘉永六年癸丑。春三月初五なり。時年二十三

語釈

都家寓居記みやうきよ 都志見家に仮住まいの記。若水先生わかしづ 都志見若水。壬子にんし 嘉永五年一八五二。尙まう 雇う、雇われる、借りる。寓きよ 宿る、仮住まい、身を寄せる。籬り 生け垣。黄菜わうさい 黄色の野菜。青麥せいばく 青い麦。居然きょぜん 居ながらにして。郊野こうやの趣おもむき 郊外の野のさま。錦屏山きんべいざん 紅葉で錦の屏風を巡らしたような山。蒼然そうぜん 青々としたさま。槿籬きんり 木槿の生け垣。槿きん 木槿。葵科あひろこの落葉低木。夏秋なつあきに一重又は八重の紅紫色、または白色の花を開く。人塵にんじん 人間の煩わしさ。旁はた 傍らに、側に。竊せう 密かに。千瓣せんぱん 千の花弁。沢山さくざんの。下垂かすい。下に垂れ下がる。光彩こうさい 光鮮やかに、彩り。盛開せいがい 満開。酣たけなわ 酒を飲んで楽しむ、酒宴のさなか真つ盛り。九華翁くわわう 玉乃九華。藩校はんがう 藩校養老館教授。五竹ごちくの師。樹下じゆか 櫻樹の下。吟詠ぎんえい 詩を吟じ詠む。低徊ていかい あちこち行き来してあたりをみまわす、彷徨わうわう、立ち去り難く歩き回る。畢ひつ 終わり、尽くす。潜然せんぜん 密やかなさま、心を静かに落ち着かせる。蓋たてし

思つに、むしろ、なんぞ。ちんらう 輒來ちんらい 即ち何時でも直ぐ来る。嘗てかつ 試みる、これまで。聚散しゆさん 集まつたり散る。悲歡ひかん 悲しんだり喜んだり。貧糞ひんせん 貧しいことが屢々。廬る 家。巳亥しがい 天保十年、一八三九。萎然いぜん 悄然と萎れたさま。貧困ひんこん 貧しく困窮。舊きう 昔のよつに、旧。枯者こ 枯れる、落ちぶれる。欣然きんぜん 欣快、喜ぶさま。蕭然しやうぜん ひっそりと物寂しいさま。燦然さんぜん 輝く、輝かしいさま。榮滋えいじ 益々栄える。瓢飲ひょういん 瓢飲ひょういん 一簞食いちたんじき、一瓢飲ひょういん、云々在り。瓢ひょう 酒や水を入れるもの、ひさご。簞たん 竹で編んだ飯櫃。漂泊ひょうぱく 漂泊ひょうぱく ちこちと漂い泊まる。愴然そうぜん 悲しみ傷むさま。晡ひ 夕方、日暮れ、夕飯を食べる頃。癸丑みづのえ 嘉永六年、一八五三。

12 野翁采風蘭圖

上有岸々千丈之長松。下有溟々萬仞之深淵。中則巉巖峭壁。不知其幾十尋也。而風蘭生焉。有一翁。被褐腰籃。繩于松根。垂繩于絕壁而下。如欲采風蘭者。嗚乎亦危矣哉。翁之命。懸于一條之繩。一失手足。則骨且弗可索矣。太史公曰。天下穰々。為利往。信哉。翁之采風蘭。足以纒糊口。而不顧其身之危。一何至此也。然以余觀之。翁其有未可笑者乎。煬帝之被弑。豈興于徒都之日耶。明皇之蒙塵。豈始于郎當之時耶。自達人觀之。沈香看花之時。蜀道之禍。已及其身矣。龍舟張樂之日。宇文之劍。既在其吭矣。而夫二帝者。以為雖天堂莫及焉。亦可憫耳。且也。七日關白。三日將軍之類。史不絕筆。則其危比翁為甚。而如翁者。未嘗聞其有隕命於深淵者也。然則彼大廈廣堂。危於一條之繩。噫。

此篇係二十二歲作

積文

野翁風蘭采るの圖

上の岸々に千丈の長松有り、下に溟々(薄暗い)萬仞の深淵有り。中は則ち巉巖(岩が嶮しく高く)峭壁(切り立った嶮しい崖)。其の幾十尋(一尋は六尺、一、八二米)か知らず。風蘭生じている一翁有りて、褐(粗末な着物)を被て籃を腰に、松の根に縋りて、を絶壁に縋りて垂れ下りての、如きは風蘭を採らんと欲す。嗚乎亦た危きかな翁の命一條の繩に懸りて、一たび手足を失しなれば、則ち骨は索す由もなし。太史公(周代の官長)曰く。天下穰々(豊かなさま)利を得るを為す信せるかな。翁の風蘭を採るは以て纒かに口糊(生活の足しにする)に足す。其の身の危きを顧りみず。一つに何んぞ此に至る、然るに余は之を觀て未だ笑うに可からず。煬帝(隋の二代の皇帝)これ弑(身分の下の者の殺される)被むる。豈千の都に徒りて興じる、この日明皇の蒙塵(天子が変事に難を避けて都から逃げ出す)。豈郎當(だらしない)の時に始まり。達人之れ觀てより沈香花を看る時、蜀道の禍(四川省の蜀道の危険な道、暗に玄宗皇帝の西幸を戒めた)己に其の身に及ぶ、龍舟(天子の乗る船)に樂を張るこの日、宇文の劔既に其の吭(喉元)に在り。夫れ二帝は以て為す天堂(天上の宮殿)と雖も及ぶ

に莫れ。亦た憫む可し且つまた七日關白。三日將軍の類い。史は筆を絶せず。其の危き翁に比べて甚だしく翁の如く未だ嘗て命は深淵に隕ちるそれ有るを聞かず。然しながら則ち彼の大厦廣堂。一條の繩に於て危し。噫。

此の篇係二十一歳作

語釈 野翁 野に下つた翁。風蘭 蘭、ふじばかま、菊科の多年生の草、秋に紫色のはなを開く、香草。采る 採取。岸々 岸の高いさま。千丈 大変に高く長い形容。長松 長大な松。溟々 暗い。萬仞 尋、高さや深さを測る単位、一尋は七尺。深淵 深い淵。巉巖 巖山が高く峻しい。峭壁 切り立つた峻しい崖。幾十尋 幾十尋。尋は七尺。一翁 一人の老人。褐 粗末な着物、ぬの、荒くて粗末な布で作つた衣服。籃 籠、大きい籠、竹の籠。松根 松の根。絶壁 切り立つた崖。索す 搜索。探す。弗 失つ、ず、あらず、否定の助字。太史公 穰々 豊かなさま豊穰。纒 僅かに、少し。口糊 口に糊する、粥を嚼る、転じて生活をする。煬帝 隨の第二代の皇帝高祖文帝の第二子、豪華を好み土木工事を起こしたが、負担に苦しむ国民の反感を買い遂に臣に殺された。弑被る 臣が天子を殺すこと。豈 どうして、なんと。徒日 徒に日を過す。明皇 明君、皇。蒙塵 世間の煩わしいことを被る。郎當 衣服がだぶだぶして体に合わないさま、馳裸子が無いさま。達人 広く道理に通じた人。学問や技芸に熟達した人。沈香 熱帯に産する香木、唐代の宮中にあつたあずまやの名。蜀道 蜀の地に建てた候国の禍。龍舟 天子の乗る舟、舳先に龍の彫り物がある。樂張 音楽會。宇文 煬帝を弑した臣。吭 喉元。天堂 天上の宮殿。唐の則天武后の建てた宮殿の名、骨相術で、額の上部をいう、極楽世界。雖 けれども、たとい。莫れ 無かれ。憐れむ 憐憫。關白 国政にちて天子に奏上する前に、然るべき重臣に其の意を通じて申し上げる、國、天皇

を補佐して政務を執行した重職。
嘗てかつ 前に。
深淵しんえん 深い淵
隕者いんしゃ 落ちる者
大厦たいか 大きな家建物、
廣堂こうどう 広くて大きい堂。
噫い 嘆息、驚嘆の聲。

13 題蘭亭帖

章子厚。日臨蘭亭一過。蘇子瞻晒之。謂從門人者。終非家珍。謝肇淛非之。當矣。然在今日。墨跡多贗。其真者。亦數經摹勒。山陰面目。十無一存矣。見此等帖。且夕臨摹。一向泥着則愈去愈遠矣。

以下二十四五歲作

蘭亭宴會之人。王羲之謝安謝萬等。合四十三人。皆當時名賢。各有述作。而今人獨知有羲之文而已。蓋羲之既以好文章。壓倒時輩一番。加之。以千古未曾有之書。是以名愈顯耳。

王羲之。為普未第一人。然在當時。推謝安。余以為不然。羲之超謝安万万。今人徒知貴其書。蓋書名掩之耳。

此文。駁莊子一死生齊彭殤。發無限感慨。極有見解。此羲之之所以遠過時輩也。蓋。當時貴老莊。無有不以一死生

齊彭殤為達者。獨羲之生于貴浮虛之世。和而不流。卓然有超人之識。故其發而見于文章者如此。

積文

蘭亭帖に題す

章子厚には日に蘭亭に臨して一過する。蘇子は瞻て之を晒う。謂う門人を従いて終に家珍に非ず。

謝肇淛は之に非ず。當に然り今日に在りて墨跡は贗(偽物)多く、數は摹勒(真似て書いたもの)を經る。山陰

(山陰は王羲之を指す)面目(体面、さすが)十に一も存在せず。此れ等の帖(書の手本)を見て旦夕(朝晩)に臨摹(手本を見て真似て書く)一向泥着(本物にはなれないの意)則ち愈よ去つて愈よ遠くなるものである。

以下二十四五歳作

解説

蘭亭帖は蘭亭は亭の名。帖は王羲之の筆跡で習字の手本となつてゐるもの。晋の王羲之ら名士四十二

人が永和九年三月三日浙江省紹興市の南西會稽山陰の蘭亭に集まり曲水の宴を行つたときの詩集の

序文の筆跡が現代までも「蘭亭帖」として書を学ぶものの手本となっている。

章子厚、蘇子についてには確かなところ、確証は困難。

謝肇淛＝明の学者。福建省の人で博学者で「書」が巧みであった。

蘭亭宴會の人。王羲之謝安謝万等合せて四十三人、皆當時の名賢各述作有す。今人獨り羲之の文を有るを知り、羲之の文章を好み以て、時輩を壓倒して一番之に加えて、千古未曾有の書は以て是れ名は愈よ顯なる。

王羲之。晋末の第一の人物を為し。然るに當時に在りて、謝安を推して余は以て然りとせずを為し、羲之は謝安を超えて万々（絶対）なり。今人の徒ら其の書の貴さを知る。書名は之を掩つ。

此の文。莊子（莊周の尊称）に駁りて一死生は彭殤（長命と短命）齊しく感慨限り無きを發す。極める見解有

り。此の羲之の以て遠く時輩を過ぎし所、當時老荘（老子と莊子とも道家）に貴く、達する為す彭殤は一死生に齊しく不やを有りや無しや獨り羲之生れて浮虚の世に貴し。和して流されず。卓然（高く抜きん出ているさま）人の識を超ゆる有り。其の發するところ文章に見るは此の如し。

語釈

蘭亭帖＝蘭亭序、行書で名高い。章子厚＝蘭亭＝亭の名、蘭亭帖、蘭亭記の王羲之の筆跡で、習字の手本、蘭亭記の晋の王羲之ら名士四十二人が三五三年三月三日の節句に蘭亭に集まり、曲水の宴をしたときの詩集の序、王羲之の作蘭亭集序。臨み＝臨席、その場に行く。一過＝さっと通り過ぎること。蘇子＝瞻る＝見る。晒＝嗤う、あざ嗤う。謝肇淛＝明の学者博學で書画巧みであった。墨跡＝筆跡。贗＝贗、偽物。摹勒＝文字は文章を模し、写し、文字を刻み付ける。山陰＝王羲之のことのこと。面目＝其の人に与えられた、世間の高い評価、メンツ。帖＝書き物、はりふだ、ピラ、書き物の手本。摹＝模す、写す。一向＝まるつきり、てんで、全く。泥着＝泥が着く、着きなすむ。愈＝いよいよ。王羲之＝晋の書家、字は逸少、官名により王右軍とよばれる、書道に優れた、日本への影響も極めて大きく、奈良、平安時代の書は全てかれの流れをくんである、作品では楷書の樂毅論、黃庭經、行書の蘭亭序、草書の十七帖などが名高い。晋末＝晋の末期、人物＝人の性質、人柄、優れた人。宴會＝酒宴、楽しむ、宴、の會。謝安＝晋の名臣。謝万＝名賢＝名高い賢人。述作＝著作。蓋＝思うに、なんぞ。文章＝あや、礼樂、れいせつと音楽や制度など、國の文化を形成しているもの、文字を連ねて一つの纏まった意味を述べたもの。倒時＝倒れた時。輩＝仲間。壓し＝抑える、抑えつける、他を抑えて。千古＝千年の昔。未曾有＝未だこれまでになかったこと。顯＝顯著、明か。万々＝掩＝覆つ、閉じる。莊子＝莊周の尊稱、書名莊周の著者、戦国時代の道家の学者、孟子と同時代の人で終生仕えず、自然に帰れと首長し、孔子の思想に反対した。彭殤＝長名と短命、彭は彭祖殤は若死にのこと、殤祖、齊駁＝等しく良し悪し

を論じ誤りを直す。感慨かんがい〓深く観じて心が奮いたつたり、嘆いたりする、感動して憤激する。見解けんかい〓物事の道理を視て覚る、意見の建て方。時輩じはい〓時の仲間。老荘らうしゆう〓老子と荘子。死生しせい〓生るか死ぬか。齊せい〓等しく。浮虚ふうきょ〓ふわふわと虚しい。卓然たつぜん〓高くぬきんでているさま、高く優れているさま。

14 櫻花頌

東方之英。扶桑之精。凝而成。蒸而生。骨水晶。髓玉瑛。香而清。明而輕。沈香之亭香兮楊貴妃醉未醒。九華之帳
暗兮李夫人影自明。花之無情。猶欲頽城。人而有誠。可感神明奈何萬物之靈。使爾獨壇美名。大丈夫生而名不向異
域轟。魂魄死而為日本獨立之櫻。

二十八歳作

釈文

櫻花頌
おうかしよう

東方の英とうほうりやうは扶桑はなづかの精せい、凝成ぎやうして蒸むして生なず。骨水こつすいの晶しやうは髓玉ずいぎよくの瑛えい。香かありは清きよく。明あらかにして輕かろく、沈香ちんすいていの沈水亭ちんすいていそれ楊貴妃やうきひ醉まつて未なだ醒めず。九華きゅうかの帳ちやう暗くく李夫人りふじん影えい自みづから明あらかなり。花はなの無情むじやう
猶なほお城しやうに頽たならんと欲ほす。人ひとに識有しきゆうするならば神明しんめいを感かず可べし、奈何いかんせん萬物ばんぶつの靈れい、爾なんじ獨ひとりり美名びめい

を壇ほしいますまにし使だいじふつがて大だい丈じふつ夫ぶ生せいして名なは異い域ぎに向むかつて轟とどろかず。魂こん魄ぱく死しして日にっ本ぽん獨どく立りつの櫻うづしを為なす。
二十八歳作

語釈

櫻花頌おうかしよつ 櫻花を称える、褒める。東方とうほう 中国の東の方。英えい 美しい花。花房けぼう 名譽。扶桑ふさう 扶桑のあるところ、転じて日本。精せい 心、魂、真
心、生命の根源。凝なう 凝らす、固める、集中する。蒸じやう 蒸す。骨水晶こつすいけい 骨は水晶。髓玉の瑛えい は脂肪状に凝固。沈香亭ちんかうてい 唐代に宮中のあるまやの名。
楊貴妃やうきけい 唐の玄宗皇帝の愛人。醒さめ 醒す。九華きゅうか 宮室や器物の美しい飾り。帳とほり 垂れ幕、垂れ布、玉帳、蚊帳。李夫人りふじん 玄宗皇帝の皇后。
自明じめい より明か、自ずから明か。願ねん 懇ろ、願、長、長い、高い。神明しんめい 神、人の心、精神。奈な いかん、いかんせん、いかんぞ、どうしようもな
い。萬物ばんぶつの靈れい 全ての物の中で最も靈妙なもの。爾じ 汝、お前、その、これ、しかり、そのとおり、のみ。美名びめい 美しい名、有名、高名。無情むじやう 定めが
ない、心がない、真心がない、情けが無い、儂い。大丈夫だいじふつ 意志が強く、立派な人。異域いぎ よその土地、外国。轟とどろ 名前が遍く知れ渡らない。魂魄こんぱく
 魂、靈魂、人が死ぬと、魂は天に上り、魄は地上に留まるといふ。獨立どくりつ 一人で立っている、人の力を借りず自分の力で身を立てる、一人立ち。
獨立どくりつ 明末の医師で志士、清の戦いに敗れ日本に亡命、明室の再興を願うが成らず剃髮して僧籍に入る、岩国藩主吉川広嘉公に招かれて持病の治療に
かゝる錦帯橋の架構の構想に大いなる寄与をした。

15 韓信出跨圖

韓信出跨。便王于齊。張良履足。漢以為帝。皆以能忍乎難忍也。然信能忍乎出跨。不能忍乎齊國之利。故致良狗之烹。漢帝能忍乎履足。不能忍乎呂氏之愛。故致牝雞之晨。不忍乎可忍。而忍乎不可忍。皆兩失之。近者。伊井氏屈膝犬羊。而喪其元。神州亦隨而陸沈。是亦忍乎不可忍者。嗚乎。江山不異。腥羶之氣滿眼。是吾人不可忍之時也。與全性命從西戎。寧為魯連蹈東海。

此篇係三十歲作

積文

韓信かんしんまた跨いすぎいす出いするいすの圖

韓信かんしんまた跨いすぎいす出いするいす。便すなわちせ齊せいの王ちやうりやうの張良ちやうりやうの足はかを履はかし、漢かんは以もつて帝ていを為なす。皆みな能よく忍しのび難がたきを忍しのび以もつて然しかして信しんじて能よく跨またぎ出またでて忍しのぶ、齊國せいこくの利しを忍しのぶに能よはず、故ゆゑに良狗りやうくの烹ほう漢帝かんてい能よく足あしに履ふくを忍しのび、

呂氏りしの愛あいに忍しのぶ能のはず。故ゆに牝ひな鶏けいの晨しん忍しのぶ可べし、忍しのばず忍しのぶ可べらざる忍しのぶ、皆みな兩りゆうつながら之これを失なつ。
近きん者しや（近頃）伊井氏いせい膝ひざを犬羊けんように屈くつして其そのの元もとを喪うしなう。神州しんしゆう亦またた随ずいいて陸沈りくちん（世よが乱みだれて亡なびる）する。是こゝれ亦またた忍しのぶ可べらずして忍しのぶ。嗚な乎や。江山こつせんは異いならず。腥羶せいぜんの氣眼きがんに滿みつる。是こゝれ吾われ人ひと忍しのぶ可べらずの時ときなり。性命せいめいを全まして西戎せいじゆうに従したがつこと、寧魯連むじろれんに為なして東海とうかいに蹈はる。

此篇係三十歳作

語釈

韓信かんしん 漢の高祖の臣、蕭何、張良とあわせて三傑とされる、謀反の罪で殺された。踏出こる 股こをくぐる。齊王せいおう 太公望呂尚。張良 漢の高祖の名臣。足履そく 足を踏む。忍しのび 忍耐。信しん 韓信。齊國せいこく 周の太公望呂尚が建てた國。良狗りやうこ 良い犬、はかりごとの巧みな謀臣のたとえ、良狗烹りやうこほう。烹ほう 煮る、料理、煮殺す、釜茹かみていでの刑。漢帝かんてい 劉邦。呂氏りし 呂后の一族。牝ひな鶏けいの晨しん 牝ひなの鶏けいが夜明けを知らせる。伊井いせい 井伊直弼幕末の大老彦根藩主、將軍継嗣問題で一橋派と対立、勅許を待たず日米修好条約を調印、反対派を大弾圧した。世に安政の大獄、万延元年（一八六〇）桜田門外の變で水戸浪士に暗殺された。犬羊けんよう 西洋人を侮蔑して呼ぶ。喪さう 喪つ、死ぬ。陸沈りくちん 陸地が沈む、人が世の中で姿を隠していること、世が乱れ亡びること、頑固で世の移りくありを知らないこと。江山こつせん 川と山、山河、ひろく國土をいう。腥羶せいぜん 生臭い。性命せいめい 万物が天から受けたそれぞれの性質、生命。全西戎ぜんせいじゆう 全西洋の夷狄。寧ねい むしろ、安らか、なんぞ、どうして、の助字。魯仲連ろちゆうれん 戦国時代齊の人、節操の優れた人物であった。東海とうかい 東方の海。蹈たう 躰は延ひる、水が漲る、水が広がる。

長州。長井雅樂。有寵見用。去歲大賜祿。予聞之。嘆曰。若雅樂。或不得其死乎。座客皆笑之。獨川子道以為信然。今茲癸亥二月。有客。携雅樂詩一首國風三首來。示予曰。雅樂。今月六日賜死。此其絕命之辭也。時門生讀書。一童子偶誦白樂天太行路篇。至朝承恩暮賜死。予不覺泣下者數行。謂客曰。嗚乎。雅樂之不得其死。固不足怪也。予於樂天詩。大有所感焉。予於雅樂。無有半面之識。而知其不能全終者。無他。唯即其建議之邪正云爾。因記。古人見執玉之高卑。以斷其人之一生。恰如龜卜。何也。蓋亦不過即失其中正而察之已。動乎四體者。猶可以斷一生。況發於其言語文章者乎。程子云。凡讀史者。讀其半。掩卷須思惟。某事以後果何如。復開卷讀之。所思與所讀不爽。則學問之增進可知。予於今日事。亦用此法。往々不爽如此。因以謂。察其機之所動。雖千里之外無半面之識者。如見其肺肝然。故人之言一行。固不可苟焉已。且夫。雲從龍常也。若龍遇雪而見。雲見蛇而起。皆非其時也。是以有亢龍之悔也。然則所謂妾顏未改君心改者。亦由妾擇其夫之不精歟。况其顏非國色者乎。遂書其所感。以自警。并以示子道。々々以為何如。

釈文

長井雅樂の詩歌の後に書す

長州長井雅樂龍み有り用うるを見る。去歳大祿を賜わるを予は之を聞き嘆いて曰う。雅樂の若き或は

其の死を得ず。座客皆之を笑う、獨り川子道以て信じて然りを為す。今茲に癸亥二月客有りて、雅樂

詩一首國風（和歌）三首携えて來たる。予に示して曰う雅樂今月六日死を賜う。此れは其の絶命の辭な

り。時に門生書を読み、一童子偶ま白樂天の「太行路」篇を誦えて、朝に恩を承り暮に死を賜う。

予は覺えず泣き下りて數行（涙がはらはらと幾筋か落ちる）客は謂つて曰う。嗚乎。雅樂これ其の死を得ず。

固くなに怪しむに足らずなり。予は樂天の詩に於て大いに感ずる所有り。予は雅樂に於て、半面の識

（一寸した顔見知りであること）にして其の終りを全うするを能はず。他に無く唯だ其の建議の邪正を即ち云

う。因つて記す。古人の玉の高卑を執らえて、以て其の人の一生を斷つ。恰も龜卜の如く何んぞなる。

亦た其の失うに過ぎず、その中の之を察して已む。四體に動く猶お一生を斷じ可し。況んや其の言語
文章を發するは程子云う。凡そ史を讀むは其の半を讀んで、卷を掩う思惟（考える）。某し事の以後
果して何如復た卷を開いて之を讀む、思う所讀む所ともに爽ならず。則ち學問の増進を知る可し。予
は今日の事に於て亦た此の法を用う。往々にして爽やかならずは此のし。因つて以て謂う。其の機こ
れ動く所を察して、千里の外と雖も半面の識無くも、其の肺肝（心の奥底）を見る然るに、故人の一言一
行固くなにも苟にも可しにせず、且つ夫れ雲は龍に従うは常なり。若し龍雪に遇うをして見るにして、
雲蛇を見るにして起つ。皆其の時に非らず。是れ以て亢龍の悔（天上に昇りつめた龍は後悔する。極めて尊貴な地位に
在る者は慎まないと失敗する恐れがある）なり。然り則謂う所妾顔（腰元の顔）未だ改めず君心改めるは亦た由し其の
夫れ妾擇（腰元を選ぶ）之れ精しくせずや。況んや其の顔は國色（優れている形容）に非らず遂に其の感ずる
所を書いて以て自警（自分を戒める）并せて子道に示す。子道以て何如を為す。

時年三十三歳

解釈

白楽天「たいこう 大行の路みち」篇。とは白楽天（七七八〜八四六）晩唐の大詩人の「新樂府五十首」の「其の十、夫婦に例えを借りて、君臣関係が終わりを善くし難いのを風刺した」詩

（参考）たいこう 大行の路みち 三十二古詩体の後半十四行の詩文から

人生莫作婦人身 人生まれて婦人の身と作る莫かれ

百年苦樂由他人 百年の苦樂 他人に由る

行路難 こうろなん

難於山 山よりも難し

險於水 水よりも險し

不獨人間夫与妻 獨り人間の夫と妻とのみならず

近代君臣亦如此 近代の君臣も亦た此くの如し

君不見左納言右内史 君見ずや左納言 右内史

朝承恩

朝あしたに恩おんを承うけ

暮贈死

暮くれに死しを賜たまう

行路難

行路こうろ難なん

不在水

水みづに在あらず

不在山

山やまに在あらず

只在人情反覆間

只ただだ人情にんげん 反はん覆ぶくの間かんに在あり

語釈

長井雅樂ながい 萩藩士、百五十石に三百石の加増を受け家老格煮引き上げられて、直ぐ先の長井建白書、孝明天皇が和歌を添えて賞したものの、

朝廷の空気の急変で、建白は下げられて雅楽は即刻帰国謹慎を命ぜられた、翌文久三年二月六日私邸で切腹した、君恩二報イント欲スレド業イマダ央ナ

ラス自ラ羞ズ四十五年ノ狂即今成仏予ノ意ニ非ズ願クバ天魔國光ヲ補ケヨ、と辞世に詠んだ遺恨の死であった、享年四十五歳、墓は萩、北古萩の海潮寺

にある。詩歌し 詩しと歌か、寵ちゆう 寵愛ちゆうあい、用見ようけん 登庸とうよう、去歲きそねん 去年こねん、昨年たいしよく 大祿たいしよく 高祿たかく、賜たまつ 下賜しんぜん、信然しんぜん 信しんじるさま、癸亥みづひ 元治元年一八六三、雅樂うた 長井雅樂ながい、國風こくふう 和歌わか、携たえ 携帶たいてい、持參ちさん、絶命ぜつめい 命いのちを絶つつ、辭じ 辭世じせい、偶ぐ 偶々ぐぐ、白樂天はくらくてん 白居易、中唐の詩人、有名な詩に長恨歌がある、太行路

長井雅樂、國風 和歌、携え 携帶、持參、絶命 命を絶つ、辭 辭世、偶 偶々、白樂天 白居易、中唐の詩人、有名な詩に長恨歌がある、太行路

河南、河北、山西省にわたる大山脈えの路、誦す 唱える、大きな声で詠む、泣下 泣き涙を流す、數行 幾筋も、樂天 白樂天、建議 意見を申

し上げる、建言 邪正 邪か正、古人 昔の人、玉執 優れた人を執る、龜卜 占い、蓋 思うに、中正 中庸で正しい、高卑 高いか卑しいか。

四體^{しだい}〓四肢。猶^{なほ}〓まだ、やはり。一生^{いっしょう}〓その人が生まれてから死ぬまでの全時期。況^{いわ}んや〓況^{きよう}、まして。言語^{げんご}〓言葉。文章^{ぶんしょう}〓あや、礼樂、礼節と音
樂や制度など、國の文化を形成しているもの。程子^{ていし}〓北宋の学者、程^{ちやう}こつと程頤の二兄弟。卷^{まき}を掩^{おほ}〓卷^{まき}を閉じる。思惟^{しゆい}〓考える、思いはかる。須^す〓求め
る、用いる、すべからく、しばし。爽^{そう}〓爽やか。増進^{ぞうしん}〓増し進める。千里^{せんり}〓遠い所。半面^{はんめん}〓半分、片側。識^{しき}〓知る。雖^{いふとも}〓けれども、たとい。肺肝^{はいかん}〓肺
と肝臟。苟^{こう}〓苟も。亢龍^{こうりゆう}〓天上に昇りつめた龍は後悔する、極めて尊貴名地位に在る者は、慎まないと失敗するおそれがある。妾顔^{しやうがん}〓妾の顔
夫擇^{とく}〓夫を撰ぶ。歟^よ〓気が安らか、か、や、の疑問感嘆の助字。國色^{こくしき}〓國の様子、趣、國風。自警^{じけい}〓自ら警戒する。并^{へい}〓併せて。子道^{しどう}〓川子道。

17 書漁隱圖卷後

錦水漁父。與盤山樵夫交善。漁父有雄辨如懸河。人不能屈之。樵夫口訥。似不能言者。然至其相對議古今論道德。漁父未必辨。樵夫未必默。人亦以為怪焉。漁父常慨乎風俗頹敗將變左衽之風。本乎春秋尊王抑夷之法崇王室。揭正道。而痛闢西夷之邪說。毫不假借也。故世。奉洋說者。惡之如仇讐。千毀百謗日至。漁父特立乎衆楚之間。獨行乎古之道。而無有撓色。於是乎。世人慕漁父之高風者亦多。從游者。日滿門。世人稱之。曰白沙先生云。漁父一旦。投筆擲硯。隱于荻蘆之間。以釣魚為事。如將終身焉。或曰。不欲與犬羊奴立。故望夕然而去也。或曰。在蠱之上九。衆方有為。而獨不事王侯。高尚其事。漁父以之。或曰。在坤之六四。括囊。无咎无譽。漁父以之世人皆不能知其志也。而樵夫獨知其志云。一日。漁父。釣于錦川之上。樵夫過之曰子樂漁耶漁。父笑而不答。投竿而歌曰。俯兮見魚躍。仰兮見鳶飛。月皎皎而出風颯颯吹衣。文王既逝矣。孔顏不可希。取竿詠而來。取竿詠而歸。樵夫和曰。采薪朝入雲。歌聲響白雲。采薪夕出雲。歌聲響白雲。出雲又入雲。颯颯氣凌雲。持來欲贈君。風吹散白雲。翌日。漁父寄此圖。以示樵夫。因書其後而返之。乙丑仲冬望後一日。樵夫書于白雲洞。

釈文

漁隱圖卷の後に書す

錦水の漁父盤山の樵夫ともに交りて善く、漁父は有りて雄辨懸河の如し。人之れに屈して能はず。樵夫口は訥にして言は能はずに似たる。然れども至つて其れ相對して、古今の道德を論じて議す。漁父未だ必ず辨ぜず、樵夫未だ必ずしも黙せず。人は亦た以て怪しむを為す。漁父常に風俗頹敗將に左衽の風に變ぜんとするを慨く。春秋尊王抑もとして夷の法を本王室を崇め正道を掲げて痛く西夷の邪説を闢くを毫(少しも)も假借(大目に見る)せず。世故(世の中のこと)これ洋説を奉ずるは、之れ悪で仇讐(敵)の如き、千毀百謗(いくらでも謗るそしり切れない)日ごと至る。漁父は特に衆楚(多くの人)の間に立つ。獨り古の道を行き、撓色(曲げる)の有りや無しや。是れ於て世人は漁父の高風を慕う亦た多く、従いれ遊ぶは日に門に滿つ、世人之れ稱して、白沙(東澤瀉のこと)先生と曰く云う。漁父一旦筆を投げ硯を擲ちて、

荻蘆（荻や蘆の水生物）の間に隠れて、釣魚の事を為し以て終身將うが如し。或は曰う犬羊奴と欲せず立して。故に望々然（恥じるさま）として去る。或は曰う蠱（人に言を与える）の上九（易の六爻のうち一番上の陽の爻）の在り。衆は方に為す有りて獨り王侯の事とせず、尚お其の事を高くして、漁父之れを以て或は曰う。坤の六四（大地に二者を並べる）括囊咎るを無し響を死ぬめ、漁父之れを以て世人皆其の志を知るを能はず。樵夫獨り其の志を知つて云う。一日漁父錦川の上に釣る。樵夫之れを過ぎりて曰う、子は漁を楽しむや、漁父笑つて答えず。竿を投げて歌つて曰う。俯して魚の躍るを見め、仰いで鳶の飛ぶを見め月皎々と出る。風は颯々は（吹くさま）衣を吹く。文王は既に逝き孔顔（孔子とその弟子の顔回）希うは可からず。竿を取つて詠じて來たる。竿を取つて詠じて歸る樵夫は和して曰う。薪を採りに朝に雲入り、歌聲は白雲に響く。薪を採りて夕に雲出をで、歌聲は白雲に響く雲を出で又雲に入り、颯々の氣（世間離れがして掴まえどころがない）雲を凌ぎ持ち來りて君に贈らんと欲す。風は吹いて白雲は散ずる。翌日漁父此の圖を寄せて以て樵夫に示す。因りて其の後に書して之を返す。

乙丑仲冬望後一日。樵夫白雲洞ここに書す。

時年三十五

語釈

漁隱りょいん 漁をして世を隠遁する。圖卷ずわん 書物、巻物。錦水きんすい 錦川。漁父りよふ 漁師、釣り人東澤瀉のこと。盤山ばんざん 盤國山。樵夫しやうふ 樵、南部五竹のこと。交善かうぜん 良い交際。雄弁ゆうべん 弁が立つ。懸河けんが 川の流れ、淹う 訥弁とつべん 口が下手。道德たうとく 人のふみ行うべき正しい路、道義だうぎ 辨ずべんず 弁える、弁論べんろん 風俗ふうぶく に習わし、風習、身なり、服装。類たゐ 崩れる、剥げ落ちる。慨敗がいはい 類敗を嘆く。左衽さぜん 左衽、おくみ。春秋しゅんちゆう 春秋時代。尊王そんおう 王室を尊敬する。抑夷よくい 夷狄を抑止する。王室おうてい 王家。崇たう 崇拜。正道せいだう 正しい道。西夷さいい 西洋人。邪說じやせつ 邪な説。闢へき 開く、開ける、避ける。毫しゆう 細い髪の毛、少し、僅か。假借かりかへ 容赦、大目に見る、借りる。洋說やうせつ 西洋の説。惡あく 悪い、強い。仇讐しゆうしゆう 敵、仇。千毀せんかい 千毀す、多く毀す。百謗ひやくぼう 百の誹謗、多くの誹謗。衆楚しゆうしゆ 皆を訓戒する、むち打つ。撓たう 撓む様子、弓なりに曲がる、怯む。擲てき 投擲、投げ出す。荻蘆てきりゆう 荻と蘆。釣魚てうぎよ 魚釣り。犬羊けんやう 西洋人を侮蔑した言葉。望々ぼうぼう 眺め、見晴らし。蠱こ 穀物につく虫、人の腹の中の虫、人に害をなすもの、損なう、乱す。衆方しゆうほう 多くの入。王侯おうこう 帝王と諸侯。坤こん 土、大地、皇后、母、妻。括囊かつのう 袋の口を閉じる、括りまとめる、ひとまとめ、口をつむぐ、知能をかくす。咎たう 咎、咎める、禍。无き 息が詰まる、咎める。譽无よき 譽れ、名譽と咎め。有無いうむ あるなし。錦川きんがわ 錦帯橋の懸かる川。過か 過り、立ち寄る、訪れる、去る、過ぎる。漁樂りよく 漁の樂。漁りよく 魚釣り。俯ふ 伏せる。兮けい 主語や文の後につけて感嘆や強調の語氣を表す助字、訓読では普通読まない。鳶とび 鳶。颯々さつさつ さつと風が吹く。皎々けうけう 白い、真ま 白。文王ぶんおう 春秋時代周の王、善政をした明君。逝ゆ 逝去。孔顔こうがん 孔子の弟子顔回。希のぞ 希む、希望。望のぞ 望む、ねがう。和わ 和。薪采しんさい 薪取り。凌しの 凌駕、越える。乙丑おつしゆう 慶応元年一八六五。仲冬ちゆうとう 陰曆の十一月、冬の真ん中の日。白雲洞はくうんどう 南部五竹の号。